

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	大同大学大同高等学校	氏名	伊藤 佳貴
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、英語教育の新しい方法として、参加型学習による国際理解教育を取り入れた指導法を開発したいと考え、その具体的な取り組みの一環として、本研修に参加させて頂いた。私はその指導を通じて、どのような人を育てたいと考えているのか。その問いかけに対して、答えにつながる大きなヒントを、私はガーナ研修中に見つけることができた。それは、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアの方々との出会いである。

彼らは、文化習慣の全く異なるこの国に来て、ガーナの人々と出会い、そしてつながり、共に明るい未来を作ろうと奮闘している。まずは、彼らのありのままの姿を子どもたちに伝えたい。そして、子どもたち一人ひとりが、ガーナや世界と「出会う」機会を作り、そこで「つながり」を感じて、延いては彼らの未来に変化が生まれるような教育実践をしたいと思う。これからの学びの中で、子どもたちが何と出会って、何を感じ、何を新たに作り出していくのか、彼らの未来の無限な可能性に期待したい。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナのコトカ国際空港に到着後、私はいきなり異文化の洗礼を浴びた。空港の税関職員に、検査を免除してあげた代わりにチップを要求されたのだ。これをどのように肯定的解釈へと結び付けたいのか、この時点では明確な答えを持っていなかった。その日の日記には「ガーナ人が迫ってくる！テンションをあげて頑張れ！」と、必死で自らを奮い立たせようとする言葉が残されている。

しかし、ガーナでの研修を重ねるうちに、それらがいわゆるガーナ流のユーモアであることを知り、研修半ばには、そうしたガーナ流コミュニケーションを楽しむことさえできるようになった。このように直接的な体験を通して得られる異文化理解の大切さを、私は身をもって再認識することができた。

帰国の日、私のカバンの中身を探る空港の税関職員に「私のお土産はどこよ？」と聞かれた。私は満面の笑みでこう答えた。「忘れたよ。また今度ね。」

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ガーナの町を見渡すと、至るところに“made in Japan”を見つけることができた。ガーナ人から日本とのつながりを見出そうと「日本と聞いて連想するものは？」と尋ねても、その返答の多くは、自動車や電化製品といった「モノのつながり」であった。

しかしながら、研修を通して、日本とガーナの結びつきを最も強く感じさせられたのは、モノではなく、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアをはじめとする JICA メンバーの姿であった。彼らは、ガーナへの情熱をもって、ありとあらゆる分野で深くガーナと結びついている。偶然に出会った現地のガーナ人からも、

「JICA の人には非常にお世話になった！」という感謝の言葉を幾度となく聞いた。日本とガーナのつながりを考える時、ガーナで働く JICA メンバーこそが、ガーナと深くつながる存在であることを実感した。

私は、このことを広く日本の子どもたちに伝える役割を担っている。そして、その子どもたちの中から次に続く未来の JICA メンバーを育てていくことも。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

天水稲作持続的開発プロジェクトは、私たちに多くのことを教えてくれる。「トラクターを買い与えることは、一見簡単であるが、それでは何も生まれないし、成功しないことを知っている。私たちのプロジェクトは一見遠回りであるが、この面倒で地道なステップをしっかりと一つひとつ踏むことで、今日の彼らの姿がある。」

こうした技術支援を通して、農村の人々は、農業技術以上の「何か」を得ることができたように思う。また、プロジェクトのメンバーも同様に、技術指導を通して、農家の方から「何か」を得たことであろう。

「あなたを助けようと思ったが、気づけば私自身が救われていた。」このような関係性のネットワークを世界中に作り、私たちににとって大切な「何か」を分かち合っていくことが、よりよい未来へのステップであることを、このプロジェクトは教えてくれたように思う。農家の奥さんが「生活が向上して体重が減らなくなった」という話を嬉しそうに語る場面に、とても心が温まったことを今でも覚えている。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」…やはり、今回の研修で最も印象的に残っているのは、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアの方々がガーナの各地で必死に取り組んでいる姿だ。その献身的な活動を目の当たりにして、心から感動している。彼らと出会い、その活動に立ち会えただけでも、この研修に参加した意義が十分にあったと思う。また、ガーナにおける彼らの取り組み一つひとつを学びながら、「日本(人)は素晴らしい」と再認識させられた。改めてそう教えて頂いたことにも、心から感謝したい。

「今後あるといいなと思う視点」…今回の研修を通して、シニア海外ボランティア(以下SV)に参加したいという思いが強くなった。さらに、現役SVの方からは、SVでの経験を子どもたちに話すためにも、現職のうちに参加するとよいというアドバイスを頂いた。しかしながら、SVには現職参加の制度がないため、どうしようかと迷っている。今後、SVにも現職参加の制度が出来てくれることを期待したい。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

③ 農家訪問／青年海外協力隊（農産物加工）活動

アダンシノース郡にある食糧農業事務所を表敬訪問した後、一行は現地の農家を訪問した。訪問先は、いくつかの家族(親族)によって一つのコミュニティが形成されており、一見すると小さな村のようであった。ここで私たちは、オレンジやパパイヤ、カカオなど、複数の果実が栽培されている広大な農園を一つひとつ回りながら、青年海外協力隊の三上志保さんから、作物の栽培状況や隊員としての活動内容などについて学んだ。彼女は、新規開拓でこの地に入り、文字通り「ゼロ」からのスタートで、村々を回りながら農業指導をしている

とのことである。現在は、収穫された作物のうちおよそ半数が廃棄されているという現状を改善すべく、各農村でジャム作りのワークショップを開催しながら、商品化に向けた活動をしているそうだ。そんな三上さんの献身的な活動ぶりに、私は心から感動した。彼女が農民から受け入れられ、深いつながりを築いていることは、村の家長が幾度となく叫ぶ「シホー、シホー！」と呼び声からも理解できた。(伊藤佳貴)

⑨ 国道8号線改修計画プロジェクト

ガーナの道路は実に多様であり、舗装道路もあるが未舗装道路も依然と多い。また、舗装道路を見ても、至る所に穴ぼこが空いていて、迂闊にその穴に落ちればパンクするばかりか事故の原因にもなる。そのような状況の中、日本の無償資金協力によって作られた国道8号線の素晴らしさは、大変際立っている。実際にその道路を通ると、自動車の騒音や振動が圧倒的に少ないことを実感する。また、路肩を見てもその施工技術の素晴らしさは素人にも分かる。バスに乗って国道8号線の素晴らしさを体感しながら、改めて日本人の技術力の高さを認識した。

しかしながら、この国道8号線は、無償協力の在り方を別の視点から考えさせられるきっかけにもなった。ガーナの国道のうち、日本の援助による道路はほんの一部である。国内道路の大半は相変わらず穴ぼこが点在する状態である。これでは何だか、国道8号線が日本の高い技術力を誇示するだけの存在にも映ってしまう。「魚を与えるのではなく、その釣り方を教えることが本当の支援だ」という観点から、こうした無償協力における課題を改めて考えさせられた。(伊藤佳貴)

⑫-1 アクラのローカルマーケット

この日は日曜日。キリスト教徒の多いこの国で、今日は安息日である。予想通り、当初の訪問先であるマコラマーケットは休みであった。そこから歩いてすぐの通りでマーケットが開いているということで、一行はそこへ向かった。雨上がりということで未舗装の路面はぬかるんでおり、そこからヘドロ臭が漂っている。

マーケットの各店には、靴や鞆、衣類など、実に様々な商品が並べられている。しかし、その商品をよく見るとその多くが中古品であった。自転車に至っては、廃棄物のように積み上げられている有り様だ。リサイクルという観点では健全とも言えるが、実際には、経済的・流通的な問題から止む無く中古品を扱っているのであろう。

マーケットの奥に進むと、聾啞者が営む店が一軒あった。そして、そこでは聾啞の人たちが集まって、手話で会話を楽しんでいた。障害を持つ人たちが、コミュニティの中に溶け込んでいる様子が印象的だった。さらにマーケットの駐車場に目をやると、そこには下肢の不自由な人たちがスケートボードのような物に乗って、サッカーに興ずる姿があった。そのような風景を眺めながら、「豊かさって一体何だろう？」と自問する日曜の朝であった。(伊藤佳貴)

⑬ カカオ残留農薬検査能力向上プロジェクト

みんなが大好きなチョコレート。日本は、その原料であるカカオ豆の70%をガーナから輸入している。本日一行は、カカオ豆の生産から加工、輸出までを管理している政府関連機関「ココボード」を訪問した。チョコ

チョコレート好きにとっては聖地とも言える場所である。

実際の検査場を見て驚いた。検査には想像以上に厳しい基準が設けられており、各検査工程は非常に細かく分類され、職人のような検査官がナイフを使って一粒ずつ豆を検査している。ガーナ産カカオ豆の品質が高いという所以はここにあったのだと納得した。

その後、一行は残留農薬の検査能力向上プロジェクトの中心となっている研究施設を訪問した。ただし、現在は新しい施設建物の建設中であり、一時的に使用している施設へ案内された。研究施設では、白衣を着た研究者によって、残留農薬の検査能力向上に関する説明を受けた。医療機関と勘違いしてしまう程の充実した設備の数々を見て、世界中で愛されているチョコレートにも日本の高い技術力が用いられていることを知り、改めて日本の素晴らしさに感心した。(伊藤佳貴)

⑬ おはようマーケット、グローバル・ママスの店など

さて、研修最終のプログラムとなった。待ちに待ったショッピングの時間である。1軒目は、日本人が経営する「おはようマーケット」。この店には、民族的な服や民芸品、シアバター製品などが売られていた。誰もがガーナセディを使い切る勢いで必死に品定めをしている。しかし、ここでちょっとした問題が発生した。一人の会計に想像以上の時間がかかっているのだ。店員をよく見ると、販売する品の品目や個数を台帳に手書きで記入している。これでは予定通りに進まない。考えた挙句、私たちは「まとめ買い作戦」に出ることで難を逃れた。

2軒目は、グローバル・ママスというお店だ。そこで日本人を発見。聞くと3年前に青年海外協力隊員としてガーナ赴任の経験があるとのこと。「一度アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカに帰る」という言い伝え通りである。ということは、私もいずれこの地に戻ってくることになるのか。

3軒目に行った店はワイルドゲッコー。個人的には最後に訪れたこの店の品々が一番魅力的であった。私はここでコーヒー豆を購入したのだが、それが非常に美味しいコーヒーで、帰国後にその生産者にメールを送り、再び購入するほどであった。(伊藤佳貴)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [FRK_3197]

◇キャプション 「ガーナ白熱教室！」

◇解説文

「授業後は何をやるの？」という問いかけに、家の掃除や弟たちの世話、路上での物売りなど、どの子も家族の手伝いをするとのこと。

しかも、答える顔には満面の笑みが……。熱く、そして深く考えさせられる授業でした。



●写真2…ファイル名 [KWD_0374]

◇キャプション 「DOOR OF NO RETURN」

◇解説文

奴隷貿易の拠点となったケープコースト城。この扉を通して幾千万のアフリカ人が“黒い積荷”として送り出されました。このような非人道的な扉が二度と開かれることの無いよう、願いを込めての1枚です。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・虫除けについては、殺虫成分の DEET が 30%ほど含まれている商品をお勧めします。なお、国内では販売していませんので、アマゾンなどで購入(海外からの発送)する必要があります。届くまで若干日数がかかるため、必要な方は早めのご購入を。
- ・洗濯が全く出来ない状況も想定して、下着類は多めに持っていくことをお勧めします。ファブリースも役立ちました。
- ・小袋に入ったお菓子を持っていくと、バスの中で役立ちます。戴いた時、その気遣いにとっても嬉しく感じました。
- ・国によっては甘い食べ物(スイーツ)が手に入らないこともあります。疲れた時に食べた井村屋の水ようかんはとても美味しかったです。
- ・ダウンした時のために、食べ慣れた日本食(レトルトのおかゆなど)があると回復が早いと思います。ただし、現地の食事を楽しむためにも、カップ麺などは極力持っていかないほうがいいと思います。
- ・異なる意見が出ることや、考えが対立することは当たり前です。大切なことは、それらをどのように組み立てていくかです。大いに議論しましょう。
- ・トイレを我慢しないようにしましょう。スケジュールを見ながら、早め早めに済ませておくとう安心です。研修にも集中できます。
- ・レストランでは、長時間待たされることもよくあります。調理時間のかかりそうなメニューの注文はできるだけ控えましょう。特に昼食時には（その後にも研修が続くため）注意が必要です。
- ・研修の後半は疲れがきます。それでもマナビシートへの記入はきちんとしましょう。ささいなコメントでも、それらは帰国後に大きく助けてくれます。
- ・研修は約2週間と長丁場ですから、体調管理は重要です。お酒の弱い人が無理して飲んだり、お腹の弱い人が激辛料理に手を出したりすると、次の日が大変になります。
- ・少しでも寒さを感じたら、1枚羽織りましょう。風邪の症状が出始めた時には遅いです。
- ・その国の歴史や文化に関する本を読んでおくことは大切です。

7. その他全般を通じての感想・意見など

私にとって、今回のガーナ研修は大成功でした（研修そのものはまだまだ継続中ですが）。振り返ると、そこ

には4つの大きな要因があると思います。まず1つ目は、同行者の古川さんと久世さんによる適切な導きがあったことです。これが最も大きな要因です。お二方がともに忍耐強く、寛容な心で、私たちを導いて下さったからこそ、この海外研修が、無事に、そして大きな成果をもって終わられたのだと思います。この場をお借りして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、2つ目の要因は、研修の仲間9名に恵まれたことです。それぞれがお互いを助け合って、そして無理なく気遣える空気が、私たちにはありました。また研修を重ねるうちに、ある程度のことなら気安く言い合える、そんな関係性も築けたように思います。今となっては、かけがえのない仲間です。ありがとう。

3つ目の要因は、JICA中部の方々、そしてガーナのJICA現地スタッフの方々のお陰です。JICAでなければ、立ち入ることもできない施設を回ることが出来ました。JICAでなければ、会うことすら許されたい方々ともお会いできました。特に青年海外協力隊の方々から頂いた熱いメッセージは、私の心に飛び火し、今なお私の中で燃え続けています。(どうでしょうか?)

最後に4つ目の要因ですが、これは他でもなく、NIED・国際理解教育センターの方々のご指導です。ファシリテーターの伊沢さんの導きが無ければ、ガーナ研修に向けた学びの明確な視点(=見る目)を持つことが出来なかったでしょう。充実した事前研修のお陰で、ガーナ研修が単なる旅行で終わらずに、しっかりとした学びの機会となりました。ありがとう、伊沢さん。また、事務を担った川合さんの導きも、私にとっては非常に大きな支えでした。メールでのやりとりを始めとして、川合さんの導きがあったからこそ、露頭に迷うことなく、研修を進めることができたのだと振り返ります。「マナビノオト」がなければ、今頃はこのレポートを前に悩みに悩んでいることでしょう。「マナビノオト」は最強の学習ツールです。ありがとうございました。

ガーナからは帰国しましたが、私の使命は終わっていません。むしろ、今がスタートラインです。この研修を通して、まずは参加型学習による開発教育のスキルを身につけます。そして、ファシリテーターとして、子どもたちとたくさんの学びを分かち合いたいと思います。これからも何かにつけてアドバイスを頂戴する日々が(年月が)続くと存じますが、どうかご指導の程、宜しく願い致します。

以上